

作家・近藤亜樹の世界（中） 失われた色彩

2021/11/10 13:47

生命力にあふれ色鮮やかな近作が並ぶ展示場から奥へ進むと世界観が一変する。作品の多くはグレーのベールに覆われたようだ。内臓や注射器などぎょっとするようなモチーフの絵もあり、色彩の違いに同じ作家のものかと驚く。影響を及ぼしたのは東日本大震災だった。一瞬にして街をのみ込み、人々の心に傷を負わせた恐怖が、彼女から色彩を奪った。



東日本大震災を題材にした「山の神様」。初めて評価され、サンフランシスコの美術館に展示された ((c) Aki Kondo courtesy of ShugoArts)

今回は残念ながら展示されていないが、大震災を題材にした「山の神様」は、近藤亜樹さんを語る上で外せない。初めて高い評価を受け、著名な作家とともにサンフランシスコの美術館に並んだ作品だ。横10メートルを超えるキャンバスに描いたのはゆがんだ木々や人間、動物に加え、太陽や風、火などさまざまな神と地蔵。「山があったから津波が来なかった地域があった。山に助けられた反面、山の向こう側ではたくさんの命が奪われた。この差は何だろうか。『自然を壊したのは人間だけど、助けてください、ごめんなさい』と祈るしかなかった。その思いをすべてぶつけた」と振り返る。

2011年3月11日、未曾有の大震災が東北を襲った。翌日の新聞で見たのは黒い海に真っ赤な炎が浮かぶ写真。これまで見たことのない光景に衝撃を受けた。恐怖から強い色を使えなくなった。

「こんな時に絵を描いていてもいいのか。何の役にも立たないのではないか」。生まれて初めて絵を描くことに疑問を持った。しかし、「どんなに苦しくても描き残しなさい。描くことを辞めてはいけない」との恩師の言葉に突き動かされた。自分の中に湧き出るものをひたすら描き続け、泣きながら手掛けたドローイングは数百枚に上った。

津波でばらばらになった友人のピアノの鍵盤を見た時、せめて絵の中だけでも昔の姿に戻したいという気持ちになった。線で描くドローイングから先へ進めなかった近藤さんが、震災後初めて筆を握った。その作品が「ピアノ」だ。友人は一言も話さず何時間も座ったまま絵を見つめ、最後に「ありがとう」との言葉を残し帰っていった。「絵は人の心に寄り添える」。作家として生きていく決意を固めた。

「近藤亜樹一星、光る」は23日まで、山形市の山形美術館。入館料は一般1200円、高校・学生800円、小中学生400円。